

「空海『風信帖』に見る『意識』」

室之園 裕 美

はじめに

次のような章立てで、考察をする。

- I 王羲之の尺牘と空海の尺牘の比較
- II 遣唐使として入遣する前と入遣した後の書の比較
- III 後の書への影響
- IV 空海の『意識』
- V むすび

I

そもそも空海の書に、日本的な美を強く感じたのには、次のような経緯がある。

以前から私は、王羲之や欧陽詢などの中国のいわゆる『古典』を

臨書する際に、常々自分と作品との間に大きな隔たりを感じていた。

こちらがどれだけ理解しようとしても、心の底からは解らない、いまいち乗り切れない思いを抱いていた。当初、それは致し方無い事だと思っていた。自分の力量不足と、漢詩や中国語に関する知識不足。それに加えて、その作品への畏怖の念というか、その様なものが一切合財合わさって、大きな隔たりを生んでいるのだと思っていた。その一方で、空海の『風信帖』を初めて見た時には、王羲之の作品を見た時に抱いた隔たりなどは感じなかった。その理由として私は「この作品が、王羲之などに比べて、品格が劣るからなのだろう。」と、少し軽視していた。

しかし、ある時ふと空海の『風信帖』を見て思った。「何と美しい余白なのだろう。」と。

空海は、王羲之を基に書かれているというのが定説である。なる

ほど、その事は一目瞭然であり、様々な文献で比較検討されているのを見ても、そう思う。しかし、何か王羲之のものとは大きく違う。

それが「中国人によるものと、日本人によるものとの違い」であるとする、今まで自分が感じてきた「隔たり」にも納得がいく。百聞は一見に如かずであるので、次に王羲之と空海の尺牘を見てみることにする。

王羲之の尺牘からは『喪乱帖』を、空海の『風信帖』と見比べてみる。

王羲之『喪乱帖』

羲之頓首喪乱之極
 先墓再離荼毒近
 惟歎甚痛兼摧絕
 痛貴心肝痛皆哀
 亦乃能即情復未獲

空海『風信帖』

風信雲香白天的以
 投之因之如揭雲霧
 惠止觀妙白頂戴
 之如法居之於以信
 法世何如空際指掌
 隨命躡攀彼嶺限以
 取不能至每之思与
 及宇山集會一虛量
 法大寺因如共建法
 仁恩德望二憚煩勞
 游赴此院此心留之
 五甲相空集其上

東嶺金蘭
 九月十日

それぞれの作品についての簡単な解説をしておく。

王羲之の『喪乱帖』は、祖先の墓を壊された悲しみを訴えた内容の手紙である。

空海の『風信帖』は、空海が三十七歳の時に、最澄に宛てて書いた手紙である。最澄に宛てて書いた手紙は、五通あったといわれるが、現存するのは『風信帖』の他に『忽披帖』と『忽恵帖』の三通がある。

『喪乱帖』が、王羲之の手によるもので、『風信帖』が空海の手によるものだという先入観が、先に述べたような“隔たり”を一方には感じて、一方には感じない要因なのかもしれない。その点に関しては、今後取り組んでいくこととする。

II

空海は、七七四年六月一五日に、讃岐国に生まれたといわれている。空海に関する資料や文献によると、空海は、一八歳で大学に入學。この頃の大学は、今とは違って、都に一つしかなく、その意義は、国の中央役人を養成するといふものであった。彼はこの大学の明経科に入学。この明経科とは、官吏になるための勉強をする学科で、主に論語や左氏伝、五経（易経、書経、詩経、礼記、春秋）を勉強したのである。しかしその大学を二年程で中退。その理由につ

いて『空海僧都伝』には「博く経史を覽て殊に仏教を好む。常に謂らく、我の習ふ所は古人の糟粕なり。目前、なほ益なし。況んや身斃るる後をや。この陰すでに朽ちなん。如かず真を仰がんには。因つて三教指帰三巻を作つて優婆塞となる。」とある。幼い頃から父親やおじから、論語や孝経、史伝といった漢籍を学んできた空海にとつては、官吏になるという目的で、それらを学ぶという事に、スケールの小ささというか辟易とするものを感じたのであろう。如かず真を仰がんには。因つて三教指帰三巻を作つて優婆塞となる”という大志を抱いて、大学を辞めたのである。その後彼は、私度僧として修行を重ねる傍ら、経書や經典、書の学習も重ね、ついに『三教指帰』を完成させたのである。その内容から分かる様に、空海は仏教こそが優れた教えであると考え、その中でも密教の教えについて、入唐してその教えを請いたいとの思いを強く持ち始めたのであろう。『御遺言』に「一心に祈感するに、夢に人有りて告げて曰く、此に経有り。名字は大毘盧遮那経といふ。是れなんぢが求むる所なり。即ち隨喜して件の経を尋ね得たり。大日本国高市郡久米の道場の東塔の下に在り。ここに於て一部緘を解いて覽るに衆情、滯り有りて憚問する所なし。更に発心をなして去じ延喜二十三年五月十二日を以て入唐す。初めて学習せんが為なり」とある。

『三教指帰』を書き進める内に、密教の經典『大日経』に出合い、

その解釈について空海の知識を以ってしても理解出来ない箇所があり、その答えを求めて、完全に『大日経』を理解したい、密教の教えをその真髓まで学習したいという思いを抱いたのである。その思いが、半僧半俗の優婆塞という身分から、出家して遣唐使として入唐できる身分へと空海をむかわせたのである。

その様な思いを抱くきっかけとなった『三教指帰』。その草稿本にあたるものが現存する。それを『聾瞽指帰』^{ろうこしきま}といい、空海が入唐する以前の書の資料として見ることにする。

この作品は、空海二十四歳の時のものである。『三教指帰』とよばれる、三教＝儒教・道教・仏教の三教について論じた本の草稿本である。

この文体は、中国の六朝時代に流行した、四六駢儷体で書かれており、書きぶりだけでなく、その内容、文章力、いずれをとっても大変優れており、空海が若くして相当高いレベルの頭脳、知識を備えていた事が分かる。

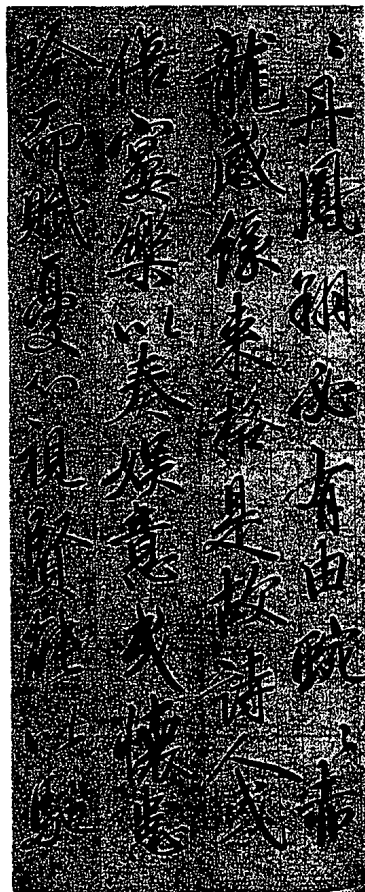
この『聾瞽指帰』の書かれた、七九七年は空海が入唐するのが八〇四年、空海三十一歳の時であるから、入唐する約七年前に書かれたものである。

結構は、王羲之の風であり、この作品から受ける印象は、中国的である。入唐にむけて、中国に関するあらゆる事柄について、猛勉強

中であつたであろう。そんな中での書である。王羲之を大変意識して書いたと思われる。

この『聾瞽指帰』をまず見てみることにする。

『聾瞽指帰』（七九七年）



空海は、密教の教え、その真髓まで学び取ってこようという大志を抱いて遣唐使に志願。その願いもかなえられ、約二十年間の留学期間を言い渡されて、中国へ渡る。しかし、二年余りで、学ぶべき事は全て学んだ、として帰国。唯一の密教の正統者である、恵果和尚に密教の教えを請い、その教えを受けている。インド直伝の唐密教の正当な教えを、空海が伝え受けたのである。その恵果和尚に「巧畢りぬ。早く郷国に帰りて以て国家に奉り、天下に流布して養生の福を増せ」「之を東国に伝えよ。努力よや。努力よや」とあることから、空海はその師の教えに従ったのであろう。二十年の予定

が二年で修了したり、異国の僧であるのに、唐密教の正統な教えを伝授されたりと、異例に次ぐ異例である。

一方、『風信帖』の方は、空海が最澄に宛てて書いた手紙であるが、この空海と最澄との接点は、この空海帰国後に生まれたのである。

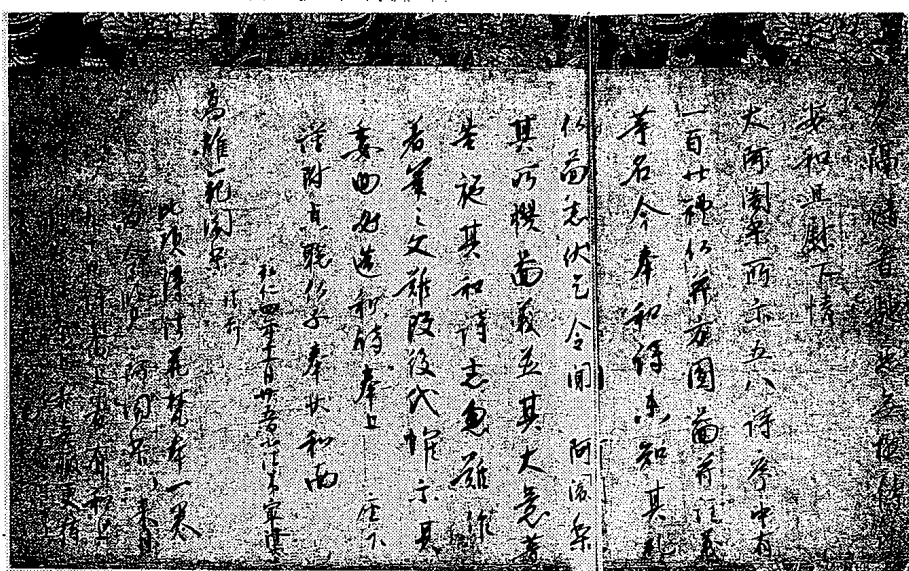
最澄は空海より、七歳年上である。異例中の異例で彩られる空海に比べて、正統中の正統、僧としての王道をいくのが最澄である。

最澄は、十二歳にして出家し、二十二歳の時に比叡山寺を建立し、八〇四年、最澄三十八歳の時に遣唐使として入唐している。最澄は、この時既に平安仏教界を代表する僧であった。八〇四年といえば、奇しくも空海も入唐している。(しかし乗った船が異っていた。)最澄のこの入唐は、短期視察を目的としていたため、翌八〇五年に帰国している。しかし、短期視察とはいえ、最澄は「唐の天台法華經の教えを持ち帰ろう」という目的を持って入唐。帰国後はその密教の教えを初めて日本に伝えたという事もあり、最澄の仏教界での地位や権威は最高のものになったのである。

しかし、その翌八〇六年に空海が帰国し、彼が天皇に帰朝報告書として献上した「請求目録」には、インド直伝の唐密教の正統な教えが書かれていたのである。これより、二人の接点が生まれるのである。

最澄は、時の仏教界での最高権威者であるのにもかかわらず、名も無い僧である空海に自分の弟子共々、密教の教えを請うのである。そのやりとりが『久隔帖』『風信帖』などの二人の手紙で分かる。

『久隔帖』



人格者の最澄が、七歳下で天才肌の空海に教えを請う。空海にとっては、この最澄とのやりとりによって、一介の僧から、仏教界にとってなくてはならない存在と成らしめたのである。

その様な相手への返事の手紙。相手（最澄）を意識しなかったはずがない。

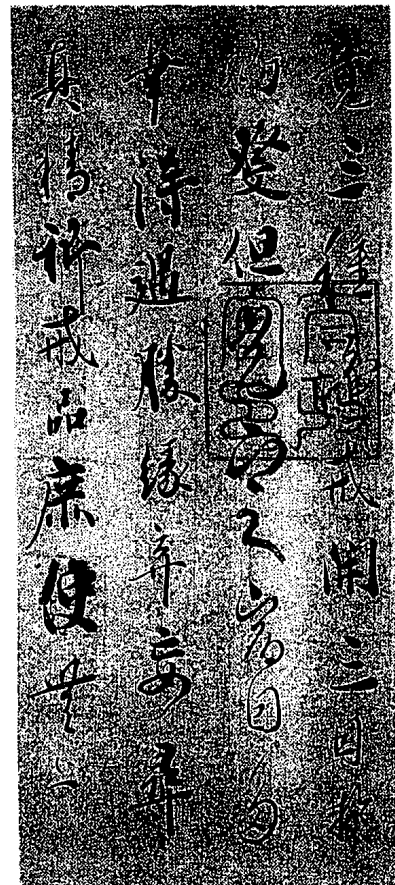
密教の教えだけでなく、書の面でも、仏教界の最高権威者の最澄に顕示する意図が働いたであろう。

空海が最澄に送ったとされる、現存する三通の尺牘を見ると、その書きぶりは、最澄では書き得ないもの、空海のオリジナリティーを織り込んだものである。つまりそのオリジナリティーの本質は、脱中国書風である。

III

そしてこの脱中国書風の書は、時の天皇である嵯峨天皇に受け入れられたのである。このことは、嵯峨天皇の『光定戒牒』こうじょうかいだつを見るところと分かる。

『光定戒牒』（八二三年）



これは、嵯峨天皇が三十八歳の時の書で、空海が四十九歳の時である。王羲之の書風だけでなく、他の要素が加えられている。

この様にして、平安時代前期において、空海の脱中国書風の要素は、徐々に広まっているのである。そうして、八三八年に遣唐使が廃止されたことにより、あらゆる文化面において、唐風の模倣が衰退し、書でいう所の『和様』の完成にむかうのである。

IV 空海を意識

極論ではあるが、空海が誰の字を習おうが、誰の字に影響を受けようが、その事は大した問題ではない。（なぜなら、王羲之という書の聖による絶対的な書の規範があるからである。）先人の優れた書を勉強するということは、書の学習には欠かせない事であり、オリ

ジナルを創り出すためにも、必要不可欠な行為である。

その事よりも、何が一番大事かというところ、自分がそこから何を自分なりの要素として、プラスまたはマイナスするかという事である。そこで、“意識する”という行為が必要になるのである。この“意識する”ことが、オリジナルを創り出すために一番重要な行為なのである。

空海はその点において、次の二点の事を意識したと考える

①王羲之の中国と、

自分(空海)は日本であるという違い。

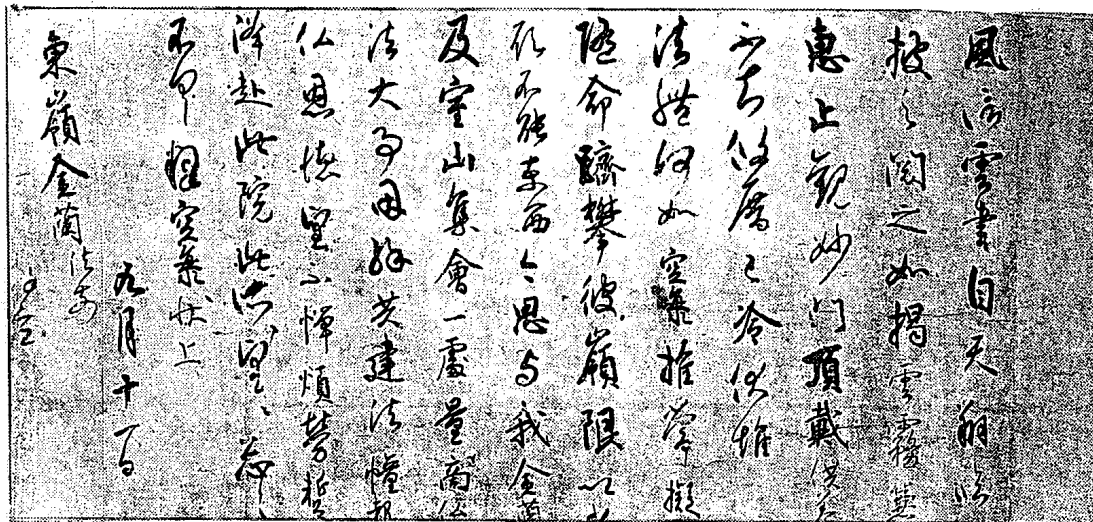
②同じ相手(最澄)への尺牘であるということ。

以上、二点である。

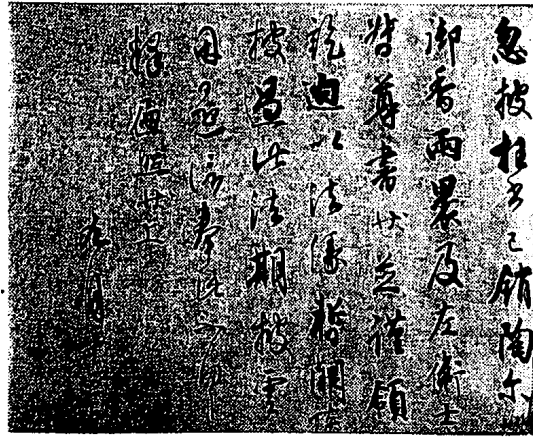
①については、Iでのべた様に、中国という雄大な、スケールの大きい自然に囲まれて、育まれて出来た書との違いである。日本人独特の美意識として表現される、わび、さびにも相通じる様な、簡素な余白美、無駄のない線質を、空海は意識して書いたと思われる。

②については、IIでも述べたが、最澄という同じ相手に宛てて書かれたのである。現存する三通の書きぶりを、ここで通して見ておくことにする。

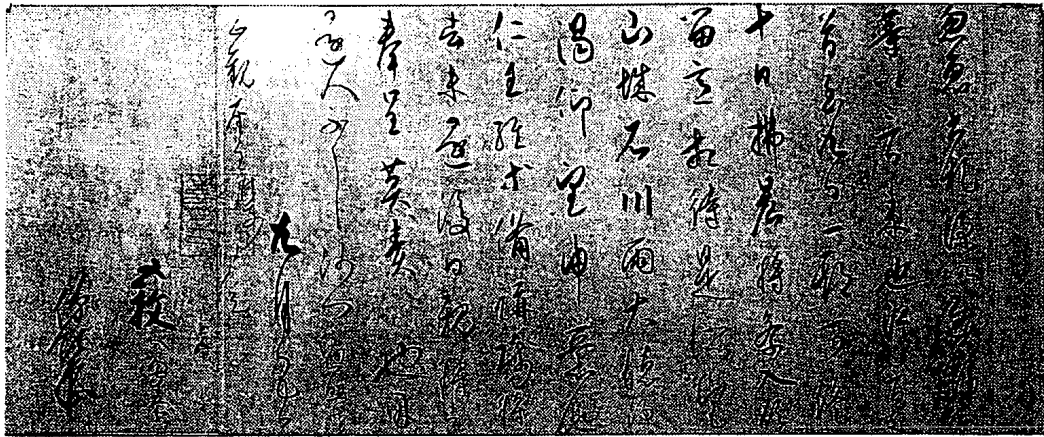
『風信帖』(八一〇年)



『忽披帖』(八一〇年)



『忽惠帖』(八二二年)



『風信帖』は、八一〇年の九月十一日に、『忽披帖』は、同年九

月十三日に、『忽惠帖』は、八二二年の九月五日に、いずれも空海から最澄に宛てて書かれたものである。

最澄という相手を意識して書かれたとすれば、前述したような、顕示するという意識の他に、もう一つ次の様な意識が伺いたとも考えられる。それは、同じ相手に立て続けに手紙を書くという事。

同じ相手に、ただ同じ書きぶりで書くのではなく、むしろ書きぶりを変えて書く方が、空海にとっては自然なことだったのかもしれない。三通とも見事にその書きぶりを異にしている。

最澄という、空海にとって最高の相手に対する手紙だからこそ、空海の最高の書きぶりが示されているように思われる。

V むすび

つまり、空海は『聳誓指帰』のように、王羲之の中国を意識すれば、中国風に書くことが可能であり、『風信帖』のように、脱中国を意識すれば、日本的なエッセンスを含んだ書きぶりにも出来る。

一辺倒ではない、変幻自在な対応ができる書き手なのである。それは、空海という人そのものともいえるであろう。

仏教の教えを請うため、中国のあらゆる学問を勉強し、その教えを受け継いだ後は、その全てを消化し、日本的なものへと昇華した

空海。

書芸の面では、王羲之という書聖と、空海その人自身を、その寛大さで以って受け入れたと思われる最澄、この二人の存在が、空海の書の発展、自由な発想を生み出す原動力であったであろう。

意識する、その時何を念頭に置いて書いたかを読み取ることが、その書きぶりの変化を見付けることにつながるのである。

〈参考文献・資料〉

- 。書道全集 第一巻 日本2 平安1
- 。書の宇宙 10 伝播から受容へ 三筆
- 。弘法大師空海・人と書 木本南邨著
- 。空海と中国文化 岸田知子著
- 。中国法書選12 東普 王羲之
- 。中国法書選13 東普 王羲之
- 。墨 一〇四号 特集空海の風信帖
- 。中国書道史事典 比田井南谷著